

【入間野武雄日記】

春の日差しが心地よい季節となりました。当館の木々も芽吹き、草花が美しく咲き誇っています。

今月の“イッピン”は先月に続き、現在開催中の企画展「～二・二六事件から90年を経て～『Why was he targeted? なぜ彼は狙われたのか?』」の中から、「入間野武雄日記」をご紹介します。

入間野武雄は、明治23(1890)年1月6日旧胆沢郡水沢町生まれ。入間野家は留守氏の家臣で、先祖は伊達政景の代に因幡(鳥取県)から水沢に來住した入間野城(宮城県)城主の別家。實の母菊治と武雄の父専次郎が姉弟で實と武雄は従弟にあたりますが、専次郎(叔父)が實(甥)の1歳年長のため武雄は實のことを「おじ」と呼び、中学以降東京の齋藤宅に寄宿し公私にわたり極めて近い間柄でした。

東京大学を卒業後、大正5(1916)年大蔵省に入り、造幣局長、銀行局長などを務めます。昭和7(1932)年齋藤實内閣の総理大臣秘書官兼大蔵書記官となり、實亡きあとには昭和16(1941)年十五銀行頭取、昭和20(1945)年帝国銀行頭取。昭和28(1953)年日本専売公社2代総裁などを務めました。

展示中の入間野武雄日記は、昭和11(1936)年2月26日、内大臣だった實が襲撃された二・二六事件当日の様子を元秘書官の立場から記録したものです。親のような存在でもあった實を失い、どのような心境で記していたのでしょうか。

記念館のある奥州市水沢では、まもなく岩手県指定無形民俗文化財である日高火防祭が4月25日(土曜日)に開催されます。それにともない当日はどなたでも入館料無料にて当館をご覧ください。今回“イッピン”としてご紹介した「入間野武雄日記」や前回の「春子手記」などを展示している企画展、そして常設展示や館内の様子をこの機会にぜひお楽しみください。



二・二六事件当日の様子が記録されている



實と入間野武雄(右)